

Journal of Chubu University Education

No. 21
2021

【実践研究・実践報告】

リベラルアーツ・パイロット授業の報告

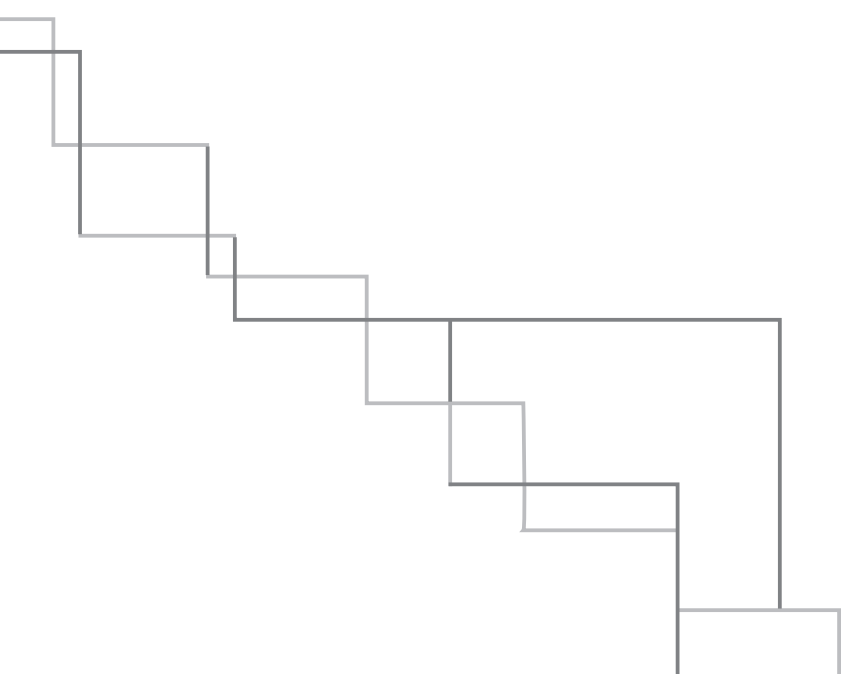
ー創造的リベラルアーツセンター（CLACE）発足に際してー 鈴木順子

【Practical Reports】

Liberal Arts Pilot Course Report:

Establishing Creative Liberal Arts Center (CLACE)

..... SUZUKI Junko



リベラルアーツ・パイロット授業の報告

ー創造的リベラルアーツセンター（CLACE）発足に際してー

鈴木 順子^{*1}

要 旨

創造的リベラルアーツセンターの発足にともない、本学においてリベラルアーツ教育が始動した。持続可能な社会実現のため総合的な人間力を養うことを目的とするリベラルアーツ授業は、調査・発表・ディスカッションといった学生の主体的授業参加の方法をとって行われる。本稿では、パイロット授業2つを紹介し、リベラルアーツ授業の現状と課題を検討する。取り上げるのは、「環境と生活」（細田衛士・石井洋二郎）、「芸術と社会」（石井洋二郎・鈴木順子）の二授業である。

キーワード

リベラルアーツ、ディスカッション、人文知、主体的参加、新しい教養教育

1 はじめに

2021年4月1日、本学に創造的リベラルアーツセンター（Creative Liberal Arts Center：略称CLACE）が発足した。これは、「知識・経験・思考・視野」という4つの限界から学生たちを解放し、持続可能な社会の実現に向けて、複雑な課題解決に積極的に貢献できる総合的な人間力を養うことを目的とした新たな組織である。したがって、センターが実施する授業は、これまでの一般教養教育で行われてきた大教室での一方向的な講義方式とは異なり、比較的少人数（30人以下）で行われ、かつ調査・発表・ディスカッションという学生が主体的に関わる双方向の方法をとって展開することを目指している。

このような新しいリベラルアーツ教育は、世界的に見れば、行き過ぎた専門教育への危機感から、すでに1990年頃より要請が高まり、この30年来多くの高等教育機関で実施され重要な教育方法と認められてきた。日本では90年代後半に教養学部解体などの世界と逆行する流れが一時期あったものの、現在では、多様化する世界において活躍できる責任ある21世紀の市民を育てる上でリベラルアーツ教育は不可欠と考える教育機関は増え、すでに大きな流れとなっている。本学も全国的なリベラルアーツ教育の拠点となるべく、文理の枠組みを越え問題意識を共有する教員が集まり、CLACEが発足したところである。

従来型の一般教養教育との大きな違いを具体的に言えば、1）多くの知識を与えることを目的としない、

2）正解が決まっていない問いや答えが1つではない問題に取り組む、3）授業の主役は教員ではなく学生である、ということである。

こうしたリベラルアーツ教育を行うにあたって、教員の側に、不慣れからくる疑念、拒否反応があるのは当然といえよう。それらを少しでも軽減できればと思い、2021年度春学期に行われた2つのリベラルアーツ授業について報告する。網羅的・包括的な報告というよりは、15回のうちそれぞれ1回だけを取り上げて具体的、スケッチ的に描写する報告である。読者において少しでもリベラルアーツ教育に対する不安が軽減されれば、本稿の目的は達せられたことになる。

CLACEは現在、全学共通教育科目として「リベラルアーツ教育科目」を準備中で、その正式スタートは2024年度の予定である。それに先立ってすでに行われているパイロット授業の中から、今回は「環境と生活」（細田衛士・石井洋二郎）、「芸術と社会」（石井洋二郎・鈴木順子）について報告する。

本稿筆者鈴木は、「環境と生活」を全回見学し、担当者両氏の許可を得た上で報告するが、文責はすべて筆者にあることをあらかじめお断りしておく。

両授業とも、対面で開始されたが、新型コロナウイルス感染状況が深刻化した時期は遠隔になった。その後感染状況が落ち着いたため、前者は対面に戻したが、後者は希望者が多かったため、そのまま遠隔を続けた。そのような学期に行われた授業の報告である。

*1 人間力創成総合教育センター 語学教育プログラム（外国語） 創造的リベラルアーツセンター 准教授

2 「環境と生活」(細田・石井) 授業について

2.1 授業内容

1つ目に紹介するのは、「特定課題教育科目」の「グローバル環境論」の枠を借りたパイロット授業で、「環境と生活」をテーマにした討論型リベラルアーツ授業である。担当者は、環境経済を専門とする経営情報学部の細田衛士と人文学部の石井洋二郎である(細田は創造的リベラルアーツセンターの協力教員、石井はセンター長)(写真1)。

シラバスの授業主旨・概要には、「環境問題は私たちの生活に直結している。この授業では、いくつかの具体的なテーマをめぐって、「環境と生活」の関わりについて多角的に検討する」とある。授業で扱うテーマは以下の4つであった。

- ① 気候を操作することは許されるか
- ② 原子力発電は必要か
- ③ 経済と環境保全は両立できるか
- ④ 新型コロナウイルスとの共生は可能か

これらは、他のリベラルアーツ授業同様、まず「イエス、ノーで答えられる質問」であり、かつ「答えが簡単に出せない問い」であることの両方を満たすものとして選ばれたテーマである。

15回の授業で、この4つのテーマを扱う。すなわち①～④は1つのテーマにつき3回の授業を使い、さらに最終2回の授業で、学生が選んだテーマ「脱プラスチックは可能か?」「食べ残しに罰金を課すべきか」を行った。学生が選んだテーマは1つのテーマにつき1回の授業をあてた。

2.2 授業の進め方

シラバスの具体的達成目標は以下の4つである。

- (1) 「環境と生活」の関わりについての基本的な知識を身につける
- (2) 特定の課題について自分で資料を調べ、発表できるようになる
- (3) 他の学生と討論することによって、自分の考えを相対化し、問題を深く掘り下げられるようになる
- (4) 現代に生きる私たちが直面するさまざまな課題について、自分の考えを自分の言葉で表現し、文章でまとめられるようになる

各目標に向けてどのように授業がおこなわれたかは次の通りである。

(1) 新しいテーマに入るその最初の回で、細田によるパワーポイントを用いた詳細なテーマ解説がある。環境経済を専門とする細田が解説を担当し、石井が討論をリードするという役割分担ができていた。

毎回問いかけやユーモアを含んだ解説が細田によってなされた。解説後、石井による「質問がありますか?」



写真1 「環境と生活」授業風景(左: 石井 右: 細田)

の呼びかけに対して、必ず手が挙がり、毎回4、5名の学生が質問をしていた。

(2) 細田の解説を聞かせる前に、まず担当学生に調査・発表をさせ、そのあとで細田が講評と解説を行うという回があった。その際には、担当者5名程度を決めた。コロナ禍で、調査に大きな負担をかけないように、調べる方法は、インターネットのみで構わないとしていた。ただ、中にはしっかりと関係図書を読んだり、またパワーポイントを自主的に作って発表したりする学生も見られた。

(3) 討論時のファシリテータは石井がつとめ、質問を投げかけたり、学生の意見をまとめて議論を導きやすくしたりしていた。

(4) ①～③のテーマが終わるごとに小レポートを提出させ、その中で優れたものを3、4点ピックアップして、優れている点、直した方がよい点を詳しく石井が解説した。名前は匿名にし、添削内容も含めて、全文をプリントアウト配布、もしくは画面共有していた。接続詞や熟語の選び方、論理の展開の仕方など、構成から細部に至るまで丁寧に行っていた。それをテーマが終わるごとに繰り返すことで、次第に提出されるレポートの全体のレベルが向上していた。

規定は400～600字だが、中には、かなり長文のレポートを出す学生もいた。例えば「②原子力発電は必要か」のレポートには、原発賛成を唱える学生が力のこもった論を提出した。その際、細田は、その論理的・一貫性のある内容を褒めた後で、以下のようなスライドを提示し(図1)、「賛成」「反対」の二項対立を越え、より多くの人が納得できる解決策をどのように見つけられるか、「賛成」「反対」の濃淡をきめ細かに見ることの大事さを示しつつコメントしていた。

以上のような流れで①～④のテーマが順次進んだが、ここでは、学期最後に、学生が選んだテーマ「食べ残しに罰金を課すべきか」を討論した時の授業(7月22日)を取り上げ、話し合いの内容を具体的に紹介する。

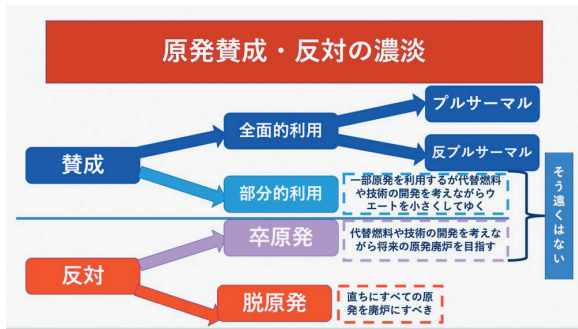


図1 「環境と生活」授業資料（細田作成）

学生が選んだテーマの回は、教員は資料を提供せず、できるかぎり学生が意見を述べる時間をとっていた。まず「食べ残しに罰金を課すべきか」を提案した学生がテーマを選んだ意図を説明した後、全員に罰金化に賛成か反対かを聞いた。賛成5名、反対11名、どちらでもない1名となった。

食べ残し罰金化に賛成の理由には次のようなものがあった。

- ・バイトの経験から、食べ残しは店側にとって非常に迷惑。残す人は結構いて、丸々一皿残す人もいる。そのような人には課すべきだと強く思う。（同意見複数）
- 石井が「飲食店でバイトしたことがある人は？」と聞くと、7、8名の手が上がった。クラスの3分の1は軽く超えていた。

逆に、罰金を課するのに反対の意見には次のようなものがあった。

- ・（こちらもバイトの経験から）食べ残しの基準、どこからが食べ残しかを決めることが難しい。（同意見複数、ラーメン店でのバイト経験者が強調）
- ・フードコートでは食べ残しを自分で処理する、それも罰金化するのは面倒。
- ・アレルギー、宗教上の理由、食べている途中で具合が悪くなり食べられなくなる場合もある。一律に罰金を課したら人権問題になる可能性があるだろう。（同意見複数）
- ・（店の立場から）お金を払ってもらったのだから、さらに罰金は取りづらい。／罰金化したら店の回転が悪くなる。
- ・（客の立場から）お金を出したのだから、その後どうしようと勝手では。
- ・客の多くは残したくてやっているわけではない。残さないシステムを作るべき。システムを作っても残す場合には悪質なのでそれに罰金はありうる。
- ・食品ロスを減らしたいなら、他のやり方があるはず。生産調整する、バイキングをやめるなどの方がいい。（同意見複数）
- ・食べ残しが問題化するの、貧困層がいるのに残す

のはどうか、というモラルの問題。インスタの承認欲求のために、大盛り注文して食べないで捨てる、は確かにモラルには反するが、でも調べたらそういう人たちは少数派だから大したことはないのでは。また、店側も、食べ切れないことを前提で出し、完食したら無料という仕掛けを提供している。罰金化したらそういう「エンタメ」が全て消えてしまう。

- ・文化の違い。中国はマナーとして食べ残す。そういう人々もいる中、食べ残す中国の文化を否定することになる。日本で罰金化していいか？

一通り意見を言ってもらった後、細田が次のようにコメントをしそれを受けて議論が行われた。

細田：国連農業食糧機関によると、食べられるのに捨てられているものは612万トンある。豊かな国は、貧しい国への援助量のなんと2倍を捨てている。貧しい国は基本カロリーも取れていないのに、豊かな国は食べきれず捨てているということだ。食品廃棄分の問題に着目したのは大事なことだと思う。

さて、皆さんの意見をまとめてみると大きく3つに分けられ、そこから罰金化以前の改善方法も見えてくる。

1) 制度（法）について

私はよくアメリカに行くが、店で食べ残すと必ずドギーバッグが出る。持ち帰り用なのだ。ドギーバッグが制度化されている。このような食べ残さない仕組みはまず大事だろう。

2) 経済について

お金で人間が動くことを上手く使う。「目に余る食べ残しは罰金を申し受けます」と張り紙をする。これはアナウンス効果というものだ。実際に食べ残しを罰金化しなくてもかなり有効かもしれない。

3) 文化（規範）

中国でも近年は、かなり社会において変化が見られる。食べ残しも問題化されている。

日本も、昭和30（1955）年代は豊かになり始めた時代で、その高度経済成長期には、たくさん消費し、ゴミもたくさん出すことが賞賛された時代もあった。時代や地域により価値観は異なることは念頭におくべきだろう。

罰金化については以上を考えてからその上で入ることが大事かもしれない。

学生1：中国などで、食べ残すことが文化（だった）ということがあったとしても、それを日本で尊重する必要はあるのか？その文化の違いの尊重は必要ではないのでは。

石井：確かに「郷にいれば郷に従え」ということはある。日本での常識が世界では通じないことも多々ある。文化の差異の問題というのは重要な問題。しかし違い

というのは優劣ではなくて、単純に差異。差異があることをまず認めよう。ところで、文化の差異を越えて普遍的に正しいことというのはあるだろうか。「食べ残しはいけない」というのは一見普遍的な真理のようだが、そうでもないと思う人々もいることは覚えておきたい。

細田：中国の経済には今皆が依存しているのを見ても分かる通り、経済には国境はない。しかし国ごとの文化の違いはどうするか。

話は飛ぶが、LGBTはアメリカでは結婚可能だが、イスラムでは鞭打ちになる。イスラムでは女性はヴェールを被るが、フランスは公共の場では十字架もヴェールもだめ。文化の違いから「喧嘩」になる問題は世界に多々ある。食べ残しをどうするかも文化の違いが関わってくるかもしれない、ただ食べ残しはそれほど喧嘩する問題にはならないが。

ここで見学者N先生の発言があった。

N先生：他者の文化を認めるというお話が出たが、気をつけたいのは、国ごとの純粋文化があるように錯覚すること。本当はそうでもないのだ。揺れ動き、多様性こそが文化になる時代ということだ。

学生2：日本には「もったいない」文化がある。世界でも褒められた。食べ残し問題は、日本が率先し、先頭になってやるべき事柄では。

細田：アメリカ副大統領のカマラ・ハリス『私たちの真実』は素晴らしい本だが、LGBT婚が「正義」だという。ここだけが気にかかった。では、それを認めない人は「不正義」なのか？そこだけ違和感を覚えた。ディスカッションして変えていくことが大事なので、自分と異なる意見の相手を「不正義」とするのはどうだろうか。

文化は制約でもある。そこからの飛躍、解放、ダイナミクスの大事さに気づきたい。ある時に制約にぶつかって、落ち込む、しかし制約を越えて飛躍する。そのダイナミックなプロセスはとても大事。多様性を大事にするということは、意見をぶつけ合っていくことであり、それが何より大事。楽しもう、わかってもらえないことも楽しもう。自分と違う人とも折り合うことを楽しみたい。

N先生：一言。LGBTは自然なことなので、カマラ・ハリスは「正義」と言う言葉の選び方が違っただけで良いことを言っているのではと思う。

細田：全く同意します。

学生が、自分と異なる意見の学生に対して自発的に発言したことと、それを受けた細田による話題の発展、さらにN先生と細田とのやりとりなどもあり、学期中もっとも自由に活発に、興味深い議論が行われた時間の1つとなった。

このように学生同士、教員同士の議論や、思い切った話題の飛躍・拡大も学生には大きな学びとなる。学生は、教員によって意見が異なること、教室においても答えが1つではないことを学ぶ。また、例えば「食べ残しの罰金化」の是非を考えるためには、自分の経験・知識をこえて、考慮すべき材料がたくさんあること、特に人、地域、時代によって、多くの考え方があることを知る。これらは複数の教員と多くの学生の意見表明があってはじめて納得される事柄である。

また、リベラルアーツ授業では、ある「問い」を考えているうちに、その「問い」の中にさらに「問い」を見出すことが多い。今回は「罰金化」の是非を考えるうちに、「食べ残し」そのものに対するさまざまな意見が出た。学生は自分の考えを相対化した上で、広く深く考える必要を実感しただろう。

3 「芸術と社会」(石井・鈴木) 授業について 3.1 授業内容

2021年春学期に開講されたもう1つのリベラルアーツ授業は「芸術と社会」である。こちらは「人文リテラシー」の「教育をみつめて」の枠を借りたパイロット授業で、同様に討論型授業である。以下、この報告をする。担当者は、前出の石井洋二郎と人間力創成総合教育センター・創造的リベラルアーツセンター兼任の鈴木順子。細田・石井の組み合わせと比較すると、専門に近い者同士の組み合わせとなった(石井はフランス文学・思想、鈴木はフランス思想)。役割分担が難しいかと思われたが、回を重ねるうちに、それぞれの個性と経験から、鈴木がファシリテーター的な役割、石井がコメントやまとめを行う役割、となった。

シラバスの「授業主旨」は次のようである。「個人の生活を豊かにする芸術だが、社会全体の中においてその意義を客観的に論じる機会を持つことは重要であるにもかかわらず少ない。この授業では以下の4つの具体的な課題をめぐって、芸術と社会の問題を考察する」。

授業で扱うテーマは以下の4つであった。

- ① 芸術は社会の役に立つか
- ② 人は芸術なしでも生きていけるか
- ③ 芸術作品に優劣はあるか
- ④ 芸術は進歩するか

さらに、こちらも最後の2回で、授業内に学生が選んだテーマ(「幸せという感情は存在するか」「タトゥーは悪いことか」)について討論を行った。

3.2 授業の進め方

この授業について多くの方の意見を伺いたいと思い、大学企画部高等教育推進課によるFD活動重点目標

『魅力ある授業づくり』の一環として行われている「全学公開授業」に応募したところ、6月10日に、23名の学内の方に見学していただくことができた。ここではその授業回の内容を取り上げる。

それは9回目にあたる授業で、上記4テーマのうち「③芸術作品に優劣はあるか」に取り組み始めて2回目の授業であった。授業方式はzoomを使用した遠隔授業であった。

公開授業にあたって提出した内容説明書には、次のように書いた。

◆ディスカッションを取り入れた授業。一方的に教員が講義するのではなく、できるだけ自発的な授業参加態度に導くよう注意している。

◆「授業方法・教授法」まずテーマについて基本的な情報を共有した上で、受講生のうち、毎回複数の担当者が関連資料を調査し、その結果についてプレゼンテーションを行う。これを踏まえて全員で自由に質疑応答・討論を繰り返し、答えが1つに定まらない問いをめぐる思考を深める訓練をする。

◆「教室環境・私語対策など」遠隔授業であっても積極的に参加発言できるよう、zoom以外の機能（slido）も併用する。

（参考：slidoは、参加者と双方向でQ & Aやライブ投票、アンケートなどを行えるWebサービス。匿名で発言しやすいこと、リアルタイムで反応が得られ参加者全体で結果を共有できることなどから、遠隔授業における受講者の授業への主体的関わりを促進する目的で使用した。）

当日の授業は以下のように進めた。

- 1) 提出された小レポートの添削・書き方指導
- 2) パワーポイントで有名絵画を見比べる
- 3) zoom投票機能を用いて「どちらが好きか」多数決、数名に理由意見を言ってもらう
- 4) 絵画の解説
- 5) ディスカッション・グループ代表による発表
- 6) slidoを用いてレポートや好きな絵画について意見を聞く

である。順に紹介していく。

- 1) 小レポートの書き方指導

前週6月2日に「②人は芸術なしでも生きていけるか」について小レポートを400～600字程度で提出してもらっていた。出されたレポートは石井、鈴木二人の教員が別々に評価し、両者とも最も高い評価を下した3点のレポートを選んで、石井が添削し（図2）、授業冒頭で講評するという方法をとった（細田・石井の授業と同じ方法）。

画面共有の方法を用いて、石井が添削したレポートに講評を行う。ブルーのマーカーは言葉の使い方や着

「教育をみつめて」（芸術と社会）レポート講評（第2回）

テーマ：人は芸術なしでも生きていけるか

2021・06・10

【芸術なしでは生きていけない】

A

私はこの3回の講義を受けて、芸術なしでは生きていけないと感じました。なぜなら、私たちはどんな環境にいても音楽や映画などで芸術に触れている人が多いと感じたからです。ただ、芸術というものは世代や人によりイメージの違いや隔りがあることがわかります。そこでまず、芸術と娯楽をどのようにがどのように異なるかを比べる必要があります。◆私の考える芸術とは、「それを作品として鑑賞するもの」、そして娯楽とは「それがあつて楽しい気分になるもの」だと考えています。しかしここで、私は芸術の中に娯楽が含まれているとも考えています。そのため、人は「芸術」なしでは生きていけないと考えました。◆そして、私にとって特に必要な芸術は、音楽と映画です。私はこの2つの芸術から様々なインスピレーションを受けました。例えば、サッカーの試合で上手いかわなかったとき、音楽に励まされたり、映画を見ることで知らない世界を知ったりすることができました。このように、肉体的には芸術は必要ないかも知れませんが、精神的に芸術を必要とする場面が多くあります。そのため、人は芸術なしでは生きてはいけないと感じています。◆また、芸術をやる側も見る側も、精神的に芸術に支えられている場面が多いと感じます。その役に入り込み現実とは別の場所に逃避することで自分で音楽を演奏したり、現実から離れて映画の役に自分を投影したりして、精神的に救われている人は多いのではないのでしょうか。どのような関わり方であっても、芸術に触れることで人の心は豊かになり、様々な感情を動かされることがあると考えています。

図2 「芸術と生活」レポート添削（石井作成）

眼点が優れていた部分、黄色のマーカーは直した方がよい部分、赤字は石井が提案する別の表現、言い換え、訂正、加筆字句である。

このように丁寧に検討し、それを全員で共有することで、レポートのレベルは回を追うごとに明らかに上がっていった。

もちろん提出者全員30名弱のレポートに対し、毎回このような添削することが理想だが、教員の負担が大きすぎて無理なので編み出した方法である。同じ学生が2回以上取り上げられることはないように配慮し、学期中でみれば10～12名、クラスの半数弱が添削を受ける。誰のレポートなのか、名前は伏せているのでわからないが、学生は他の学生がどれくらいのものを書いているか興味を持つ。これくらいを目指せば良いのか、とか、自分でもこれならできそうだ、ということを実感させ、内発的に意欲を高めることができる。効果が高い方法だと感じた。

- 2) 絵画の比較

前週6月3日には、2つの資料を読み、芸術の中でも音楽の「優劣」について考えていた。1つは「大衆に人気のある音楽が必ずしも優れた音楽とは限らない、優れた音楽を知るためには専門家の意見を聞くことも大事だ」という評論家猪木武徳氏の主張（猪木武徳『社会思想としてのクラシック音楽』新潮選書Kindle版、2021年5月、No.4189-4190）である。他方は「大衆に人気のある音楽は基本的に優れた音楽なのだ、大衆の判断は信頼できる」という作家松本隆氏の記事である（『朝日新聞』2021年4月10日、「be」1、3面）。

そして「芸術作品の優劣は誰が決めるか」をめぐる、どちらの意見に賛成かをグループディスカッションし、代表者が発表した。その際出た意見は、松本隆

氏（芸術の優劣の判断は大衆が決める）に同意するものが多かった。

その前週の授業内容を踏まえ、今回は美術作品の優劣は決められるかの問題を考えるべく、パワーポイントを用意した。そのパワーポイントを見ながら、まずは「どちらの絵が好きか」と学生に聞くことから始める。紹介する絵は、マネ「草上の昼食」とカバネル「ヴィーナスの誕生」である（写真2）。どちらも1863年の作品で、現在では圧倒的にマネの作品の方が有名であるが、サロン出品時には、マネは落選し、カバネルの作品が最優秀賞を取ったという、美術史に残る曰く付きのライバル絵画同士である。

学生にはそれらの背景は一切伏せ、まず自分の美的直感でどちらが好きか決めてもらった。



写真2 「芸術と生活」授業風景（左：鈴木 右：石井）
モニター画面の左がマネ、右がカバネルの絵。

3) 「どちらの絵が好きか」zoom投票機能を用いて投票

どちらかというとかバネルの方が好き、とする意見が多かった。その理由を数名が自発的に発表した。

それを受けて、石井がコメントをした。

4) 絵画の解説

石井：（1863年のサロンについて解説、当時はカバネルが、現代はマネが評価されていることを指摘したあと）専門家の間でも当時の人々と現代の人々とは優劣の判断が異なることがわかっただろう。

前回は音楽について、大衆と専門家のどちらが芸術作品の優劣を決めるか、専門家と一般大衆の判断の違いということを考えたが、今回は、過去の専門家と現代の専門家、という専門家同士の判断の違いがあることを指摘したい。大衆についても同じだろう。芸術作品の優劣の評価は、歴史を通じて変わるということだ。

授業前半が終了し、10分間の休憩を挟んだ。

5) ディスカッション・発表を行う

テーマ「絵画、音楽において価値の優劣はあるか？」をzoomのブレイクアウトルーム機能を用いて4、5人1組で20分間ディスカッションしてもらった。あらか

じめ、取りまとめ代表者を決め、グループのメンバーは話しやすいように同じ学部同士にまとめた。

最後にグループ代表に意見を言ってもらった。価値の優劣をめぐって、1) 大衆と専門家、2) 歴史を通じて生じる価値判断の変化、3) 客観的情報を得たことで起きる芸術作品に対する主観の変化、4) 判断妥当性の有無など、考えるべき枠組みが複雑になったことを実感したことが伝わった。

今回の授業の大きな目的は、「芸術作品における価値」というのは、ある程度の優劣は決まるが、究極的に作品そのものの普遍的価値があるわけではなく、受け手の社会的背景・歴史的文脈に依ること、かなり相対的に決定されるものであると感じて欲しいということであった。また、マネとカバネルの例でもわかるとおり、専門家の判断も時代によって変わるので、大衆における流行や人気の移り変わりとはほぼ同様であることに気づかせたかった。それらを踏まえつつ、では自分がある作品を好きになるとはどういうことか、実は自分の好き嫌いの主観的判断も自分が育ってきた環境、時代や社会状況によって影響されるものであることを自覚させるという最終目標の準備段階としてなされた授業であった。今回の授業冒頭で「どちらが優れているか」ではなく「どちらが好きか」と尋ねたのも、そのほうが理由も含め答えやすいだろうという配慮と同時に、さらに、テーマ最終週に「なぜ自分は・・・が好きか。それは偶然かそれとも理由があるか」を考えさせ自己の判断を相対化させたいという目的があったからであった。しかしこれらの内容は全て、教員から伝えるのではなく、ディスカッションを通して自ら感じ取らせることを目指したことが重要であった。ディスカッションの発表報告を聞く限り、ほぼ目的は達成できたのではないかな。

6) slidoを用いて意見を聞く

授業の最後にwebサービスslidoを用いて、アンケートを行った。

1. 「小レポートを書く上で難しいと思うのはどのような点ですか、小レポートにはどのくらいの時間をかけていますか」

2 時間程度という回答が多く、また、「自分の言いたいことを人に伝える言い方でまとめるのに苦労する」という意見が多数だった。

2. 「あなたが好きな絵はありますか？心に残る絵画があれば教えてください」

思っていたよりも多数のいわゆる有名な絵画と画家の名前が次々挙がり、驚かされた（ゴッホ、ピカソ、モネ、ルノワール、ミレー、フェルメール、レンブラント、ゴヤ、ムンク、クリムト、ミケランジェロ。さらに光琳、バンクシーなど）。（翌週、これらの作品の

中から10絵画を選んでパワーポイントを作り、授業に使った。)

授業終了直前に、翌週はテーマ最終回であるので「なぜ自分は・・・が好きか・・・に興味がないか、それは偶然かそれとも理由があるか」を考えることにしよう、と伝えて終えた。

3.3 見学者による授業へのコメント

見学者には、特にコメントをいただきたい点として、

1. 学生が自発的に発言できているかどうか
2. 互いに意見を交わす中で各自の思考が深まったり変化したりしているかどうか。すなわち、勝ち負けではなく実りある討論ができているかどうかについてコメントいただきたい旨お願いしていた。

授業後いただいたコメントシートを紹介すると、もっとも「授業方法で良かった点」は、

- ・レポート添削によるフィードバック (図2)。5割近い方(23名中11名)が良かった点に挙げた。理由は、レポートの良い部分を誉めてから指導に入る点、ワードを色分けして見やすくしていた点であった。

- ・学生の意見を引き出している。4割(9名)から良かったと指摘があった。理由は、声かけの工夫や役割分担による雰囲気作りであった。

- ・zoom投票やslidoの利用、ブレイクアウトルームの使用。こちらも4割(9名)が評価した。

「改善すべき点」として指摘があったのは、ブレイクアウトの利用の仕方についてだった。4名から指摘を受けた。

- ・ブレイクアウト中の時間の使い方について、学生の発表の仕方についてそれぞれもっと指導があって良い
- ・ブレイクアウトで意見が言いっぱなしになっているのではないか、などであった。残念ながらまだまだ学生同士のかみ合った「実りある討論」は達成できていなかったと言える。

これらの評価・指摘に対し、報告者から見学者全員に向けて以下のような反省と御礼を送った。

「見学者の先生方への御礼

学生が積極的に参加し自主的な学びをすることを目標とした授業ですので、今回はたまたま資料提示を教員が行いましたが、それを学生に任せて発表させるのがより良い方法かと思います。

また、ディスカッションについては、今回は学生個人が感想・意見を述べ合うにとどまりましたが、段階を踏んで、互いに「質問をする力」「反対意見を述べる力」「自分の考えを変化・深化させる力」「多様な意見をまとめる力」などの様々な討論の力が、徐々に身につくよう目指しているところです。

授業準備に関しては、一般講義に比べますと教員側

の負担は小さいですが、授業中に様々な意見が出たとき臨機応変に対応することが求められますので、今後はそれに慣れるのが課題と思っています。」

4 両授業の特徴と課題

ここまで「環境と生活」「芸術と社会」の2つの授業から1コマずつ取り上げ具体的に紹介してきた。ここからは、それら2授業を比較し、共通する点と異なる点とをまとめ、リベラルアーツ授業を行うに当たって目下どのような課題があるかを考えたい。

4.1 両授業に共通する成功点

1) 話しやすい雰囲気を作ること：2人の教員の専門領域が異なる場合も、似ている場合も、役割分担をすること、つまりファシリテータ・質問役と、解説・まとめ役とを分ける方が、授業はスムーズに進み雰囲気も活気づくようである。その役割は1回ごとに交代してもよいだろう。

2) 学生自身が選んだテーマで討論を行うこと：両クラスとも「話し合ってみたいテーマを出してください」と呼びかけると、20以上のテーマが提案された。何度も投票を繰り返し、最後に多くの票を獲得して残ったテーマ2つに絞り込んだ。この投票過程もとても興味深いものである。学生が自発的にどのようなテーマを討論したいとして提案するか、どのテーマに票が集まるかを知ること、クラス全体の問題意識を、教員も学生も知ることができる。また、自分たちで選んだテーマは、教員が与えたテーマよりもずっと積極的に討論される。今後は、教員が考えさせたいテーマの割合を減らし、学生自身が選んだテーマを扱う時間数を増やすなどしていくべきだろう。

3) 評価の仕方：話すのが苦手である学生に不利にならないよう、決して発言回数などでは評価しないこととした。評価は、レポートにおいてどのように「自分がどう深まったか、変わったか」が表現されているか、で行った。

4.2 両授業で異なる点ー生かすべき点と改善すべき点ー

討論に必要な基本知識をどのように得させるかは、リベラルアーツ授業においては大きな問題である。討論に先立って必要な基本知識を、教員が多めに授けるのか、控えめに授けるのか、もしくは学生の自主的調査と発表に任せるか、両者をどのくらいの割合で混ぜるか、は、担当教員の方針次第で判断してよいだろう。その点を踏まえつつ、両授業を比較すると次のようになる。

1) 「環境と生活」に関しては、細田の解説が専門性の高さや幅広い学識の両方を兼ね備えつつ、大変わか

りやすく配慮されたものであったため、その聴講時間は必然的に長くなった。そして説明に対して、毎回必ず4、5名の学生の質問があった。そうした担当教員の特性を生かした、説明・質疑応答時間を多く取るやり方が、この授業の特徴であった。他方、それらに多くの時間を割いたこと、さらに対面授業における感染防止の配慮が必要だったことの両方から、学生同士のディスカッションの時間が確保できなかった。

2)「芸術と社会」も、1)に比べてボリュームは少ないものの、全ての資料を教員側が用意した。当初の目標は、学生全員に1回はテーマ資料の調査・発表をさせるということだったが、コロナ禍で遠隔授業が急に始まったことなどもあって、できなかった。また、教員の説明に対して、質問を受ける時間が少なかった。その代わりディスカッションは毎回行えた。

5 おわりにーこれからの実りあるリベラルアーツ授業のために(Q&A形式で)ー

これまで述べてきたことを振り返ると、リベラルアーツ授業においてまずもっとも大事なことは、全員が安心して話すことができる雰囲気を作る、ということに尽きるだろう。そのためには、担当教員の個性、2名のコンビネーションを生かし役割分担をするなどして、学生の積極性を引き出すべく様々な働きかけをすることが必要になる。そのためには、教員同士が互いの専門を越え、真剣に楽しく討論するのを見せるのも有効である。

学生は、経験・知識の多くをバイトやサークル、友人や家庭、ネット情報から得ており、そのようなある種「未熟」な「市民知」に触れると、「成熟」した「専門知」を持っている教員側はすぐに「正解」を伝えたくなり、それが教育的使命だと思いがちである。しかし大事なことは、それら「市民知」をいかに「人文知」と結びつけつつ、視野と思考の限界を自ら突破させるか、それこそがこれからのリベラルアーツ授業では必要とされることである。教員が「専門知」を、学生が「市民知」を持ち寄り、すべての知の基本にある「人文知」にともに結びつけていく作業が必要になってくるだろう。

最後に、公開授業後の「授業見学コメントシート」でいただいたり、もしくはこれまでに寄せられたりした疑問にQ&Aで答えてみたい。

Q1: 話すことが得意でない学生には不利、無理ではないか

A1: 上に繰り返し述べたように、雰囲気作りや傾聴に徹するなど、そうした学生も徐々に話せるようになるべく配慮することは必須である。また、評価の仕方も上記の通り考慮が必要である。

さらに、あらかじめ「今日は…について、全員に意見を言うてもらう予定です」とか、「…のあと、…の順番で聞くので、考えておいてください」など、心構えをさせ準備時間を与えることも大事である。自発的な発言や活発な議論を性急に強いず、それらは次のステップ目標とするべきだろう。

それらを前提の上で、あらためて考えたいのは、なぜ授業において話すことが得意でない学生がいるのか、ということである。おそらく多くの学生は、これまで教室においては「正解」(のみ)を言うことを求められてきたため、教員が考えている「正解」が何かわからない時、学生は戸惑い緊張し恐怖を感じるのではないだろうか。これまで「不正解」を言ってしまう、叱責されたり恥ずかしい思いをさせられたりした経験が多々あるのかもしれない。

まず、学生全員が「ここでは、一人一人の意見は同様に尊重される」、「ここでは何を話しても大丈夫、決して否定されない」と感じ安心して自分の考えを発言できる雰囲気作りが何より大事である。教員は自らの「専門知」や信念と異なっても傾聴し、待つことが大切になる。

ただ、上記のような配慮をしたとしても、精神的・物理的な理由で人前での言語表現が叶わない学生がいることは事実である。昨今は、内容が伴わない言語表現・発信であってもそれが得意で社交上手でさえいれば評価される風潮があり、リベラルアーツ教育がそうした傾向に拍車をかけるようなことがあっては決してならない。人と人との間を言葉で結ぶことの大切さを説くリベラルアーツ教育ではあるが、今後言語表現が苦手な人の「声なき声」に対する傾聴と、彼らの言語表現以外の自己表現に対する敬意とを、いかに確かなものにしていくかについては、真摯な研究が必要と考える。

Q2: 知識量が少ない学生には不向きではないか。

A2: たとえ知識量が多くても、自ら求めた知識でなければ、すぐに忘却することは自明であろう。リベラルアーツ教育は、長期的視点に立ち、何が必要な知識かを自分で判断し、獲得に自発的に動くようになることを目指す。また、たとえ現時点で知識量が少ない学生であっても、彼らなりの市民知は持っており、誇りを持っている。一人一人の個性はそこにあり、それをいかに人文知に繋げるかをリベラルアーツは考える。

Q3: 知識を与えねばならない授業では導入しにくいのではないか。

A3: 「何を学ぶか」があらかじめ決まっており、「多くの内容を効率よく教えること」が必要な授業もある。そうした授業ももちろん大切であるので、リベラルアーツ授業はそれと並行して行われることが望ましいだろう。

う。リベラルアーツ授業は、「学ぶこと」を一生の営みと考え、「何を学ぶか」よりも、一生役立つ「学びの態度」の養成に力を入れる。それがリベラルアーツ教育の使命とするところである。

Q4：なぜ2人教員制なのか

A4：これには明快な答えがなく、もちろん1人でも可能ではある。しかし2人以上いると、役割分担ができ、授業の進行・雰囲気作りが容易になるし、何より教員により「正解」が異なることが鮮明になる。それを伝えるのもリベラルアーツ教育の大事な責務である。

例えば、「芸術と社会」の授業中に、「どれを芸術作品と認めるか？」を、担当教員と見学教員3名の計5名で挙手した時、明らかに「芸術」と認めるものの範囲は5人5様で異なった。こうした事実を学生に如実に示せること、「正解」は1つではないことを伝えられることから、可能な限り複数教員で担当することが望ましい。

Q5：準備する上で教員の負担が大きいのではないか。

A5：教員が専門知をしっかりと準備して教授する授業に比べると、実は準備負担は軽い。他方、どのように教員が自らを相対化するか、どのように学生の市民知を受け止め、即時に人文知に結びつけるか、という点になると、毎回臨機応変の対応が求められるだろう。

Q6：ディスカッションでは勝ち負けを決めるのか。

A6：ディスカッションはディベートとは異なることに留意が必要である。ディベートは一定のテーマについて、賛否2つのグループに分かれて行われる討論である。他方、ディスカッションは、1つのテーマについて自由に意見を出し合う議論、話し合いである。前者は必ずどちらかの意見に属さねばならないという縛りがあり、勝ち負けも決めるが、後者は自由に自らの意見を表明でき、結論を必ずしも出す必要はない。（参考：角川類語新辞典、デジタル大辞泉）

したがって、ディベートにおいてはしばしば相手を打ち負かすことが目的化するが、ディスカッションに

おいては、意見を出し合う過程こそが重要視される。後者こそ、リベラルアーツ授業が行うものである。

今後もしベラルアーツのパイロット授業は続けられ、例えば「言語と教育」「科学と哲学」「格差と差別」などの多彩な授業が展開される予定である。2022年度からは、大学院新教育プログラムである「持続社会創成教育プログラム」との連携も開始される。

CLACEではリベラルアーツ授業の2024年度正式開講に向けて、方法や内容の問題点を改善し、より充実した教育を目指していく。そのため、2023年度内まで行われるパイロット授業は、どの授業も全てが公開授業であると言っても過言ではなく、学内者の見学を常に歓迎している。今後もしび多くの方々に見学・参加していただき、ご意見を賜りたい。

末筆ながら、報告をお許しくださった細田先生、石井先生、公開授業ご担当の大学企画室高等教育推進部の皆様、また学期中お忙しい中見学・参加していただき貴重な気づきをお与えくださった各先生方に、心より御礼申し上げます。

リベラルアーツの基本図書や、人文知と倫理的思考の関係についても紹介・論考をしたかったが、紙幅が尽きたので稿を改めることとする。

参考文献

- 1) 石井洋二郎「創造的リベラルアーツセンターがスタート」『ANTENNA』No.152、2021年7月、2頁、学校法人中部大学
- 2) 鈴木順子『中部大学リベラルアーツ論集』第3号、2021年3月、中部大学学術情報リポジトリhttps://library.bliss.chubu.ac.jp/?page_id=109 2020年度秋学期、安楽死について討論したリベラルアーツ・パイロット授業の記録と考察。
- 3) 石井洋二郎編、藤垣裕子・國分功一郎・隠岐さや香執筆『21世紀のリベラルアーツ』水声社、2020年

Liberal Arts Pilot Course Report : Establishing Creative Liberal Arts Center (CLACE)

SUZUKI Junko^{*1}

*1 Associate Professor, Language Program (Foreign Language), Global Education Center,
Creative Liberal Arts Center, Chubu University

Abstract

The establishment of the Creative Liberal Arts Center has marked the launch of liberal arts education at the university. Liberal arts courses, which aim to cultivate comprehensive human skills toward achieving a sustainable society, are conducted through the active participation of students in course activities such as research, presentation, and discussion. This paper will introduce two pilot courses and examine the current status and challenges of liberal arts courses. The two courses to be presented are “Environment and Life” (Eiji Hosoda and Yojiro Ishii) and “Art and Society” (Yojiro Ishii and Junko Suzuki).

Key words

Liberal arts, discussion, humanistic knowledge, proactive participation, new liberal arts education